

H-2

「も」の解釈への統語論的アプローチ

—累加と全称を中心に—

榎原実香（大阪大学大学院）

1. はじめに

日本語の「も」は、前後の文脈、生起環境などによって多様な意味解釈が得られる。本発表では、(1a)のような他の同類の事態を想定する「も」を累加の「も」、(1b)のような「すべて」を意味する「も」を全称の「も」と呼び、これらの意味の違いを統語構造によって説明する分析を提案する。

- (1) a. 先生が太郎をたたいた子どもも叱った。
b. 先生が誰をたたいた子どもも叱った。

2. 「も」の意味的特徴

2.1 累加と全称

沼田 (2009) によると、累加の「も」は暗示的意味のレベルで他者を肯定するとりたて詞であり、(2b)は「も」の付加によって「先生が叱った誰かが他にいる」ことを暗示する。(2a)と(2b)はどちらも同じ「先生が太郎を叱った」ということを表し、「も」の付加は明示的な意味に影響を与えない。一方、(3b)のような全称の「も」は(3a)と同様「すべて」を意味する要素として扱われることが多い。

- (2) a. 先生が太郎を叱った。 b. 先生が太郎も叱った。
(3) a. 先生が子どもを全員叱った。 b. 先生がどの子も叱った。

Kobuchi-Philip (2009) は不定語と「も」が共起する場合、その構成メンバーに個々に累加の「も」が適用され、その計算の結果全称性が生じるとしている。

- (4) 子ども = {太郎, 花子, 次郎, ゆり}
(5) どの子も叱った。 $\left\{ \begin{array}{ll} \text{a. 太郎も叱った。} & \text{b. 花子も叱った。} \\ \text{c. 次郎も叱った。} & \text{d. ゆりも叱った。} \end{array} \right.$

本発表では、Kobuchi-Philip (2009) による(6)のような「も」の意味表示を援用し、「も」の基本義を「累加（条件を満たす要素が他に存在する）」とした上で、議論を進める。

- (6) $Mo: \lambda P \lambda R \lambda x [\dots \wedge (((AT(x)-AT(\oplus P)) \cap R) \neq \emptyset)]$ (Kobuchi-Philip 2009: 185 より)
(7) a. 先生が太郎も叱った。 (= (2b)) (太郎以外に先生が叱った人がいる。)
b. 先生がどの子も叱った。 (= (3b)) (子ども x 以外に先生が叱った人がいる。)

2.2 不定語と「も」

Nishigauchi (1990) 等によれば、日本語の不定語と「も」や「か」との関係に局所性が見られ、(8)のような構造の場合、不定語はより近い「か」と結びつき、「も」は累加の「も」として解釈される。

(8) 先生は、[[誰をたたいたか]聞いた子どもも]叱りましたか。

しかし(9)のような構造の場合、(9B₁)と(9B₂)のどちらの回答も得られ、Shimoyama (2006) も指摘しているように Yes/No 疑問文としても Wh 疑問文としても解釈される。よって、不定語が全称の「も」と結びつくことも「も」を越えて疑問の「か」と結びつくことも可能であることがわかる。

(9) ① (先生が誰かをたたいた子どもを全員叱ったかどうか確認している。)

A: 先生は誰をたたいた子どもも叱りましたか。

B₁: はい、(誰をたたいた子どもも) 叱りました。(全称)

② (先生は太郎をたたいた子どもを叱った。他に誰をたたいた子どもを叱ったか確認している。)

A: 先生は誰をたたいた子どもも叱りましたか。

B₂: 花子をたたいた子どもも叱りました。(累加)

累加の「も」と全称の「も」が同じ意味表示をもち同じ統語位置に生起するとすれば、上記の文の多義性が十分に説明されない。そこで本発表は、「も」の意味解釈の違いを「も」の統語構造によって明らかにすることを目的とする。

3. 「も」の統語的特徴

青柳 (2006) によれば、「も」のようなとりたて詞は必ず何らかの基体に併合しなければならないことから形態部門では機能範疇の主要部に付加する接語的な要素である。以下のような助詞残留は全称の「も」としては容認されにくく累加の「も」としては容認されることが明らかであり、全称の「も」は接語的に基体に直接付加する構造、累加の「も」は接語的でない別の構造をもつことが予想される。

① 全称の「も」

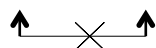
(10) A: 先生はどの子も叱りましたか。 B: # \emptyset も、叱りました。

② 累加の「も」

(11) A: 先生は太郎も叱りましたか。 B: \emptyset も、叱りました。

また、Saito (2007) や Sugisaki (2011) 等によれば、日本語の項削除では削除された要素との一致を必要とするような要素の残留が許されず、(13b)は Wh 疑問文として解釈されない。また、Ikawa (2012) は、音声的に具現化されない要素が他の要素との一致に必要な素性をもたないことを指摘している。

(12) a. 太郎は[自分の弁当を] 食べた。 b. でも花子は \emptyset 食べなかった。



(13) a. A: ジョンは何を食べたの? B: りんご。(Sugisaki 2011: 69 より)



b. A: じゃあ、メアリーは \emptyset 食べたの? B: #みかん。

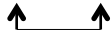
c. ジョンはビルが何を食べたか聞いた。



d. *ジョンがビルが 何 食べたか聞いたのは、何をだ。

このことを踏まえると、全称の「も」と累加の「も」の対照は、全称の「も」が付加した名詞句内要素との一致を必要とするのに対し、累加の「も」が名詞句内要素との一致を必要としないということを示していると考えることができる。

(14) どの子 も 叱りました。



(15) 太郎 も 叱りました。

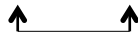


4. 「も」の解釈と統語構造

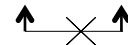
本発表では、不定語がもつ wh 素性の非顕在的移動を仮定し、「も」が wh 素性を照合する位置にあるかどうかによって意味解釈が変わるという説明を試みる。一致の統語的關係として指定部・主要部の一致 (Spec-head agreement) を採用すると、以下のような構造が予想される。

① 全称の「も」： 主要部付加

(16) 先生は_[DP] ど_[D] の子_[DP] も_[D+]] 叱った。

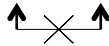


(17) *先生は_[DP] ど_[D] の子_[DP] も_[D+]] 叱った。



② 累加の「も」： 最大投射付加

(18) 先生は_[DP] 太郎_[DP] も_[D+]] 叱った。



4.1 全称の「も」

(19) 先生は、_[CP] 誰_[wh] を _[DP] 誰か_[DP] を たたい _[NP] _[CP] 誰_[wh] を たたい _[NP] _[CP] 誰_[wh] を たたい _[NP] 子ども_[DP] も_[D+]] 叱りましたか。

① 先生が誰かをたたい子どもを全員叱ったかどうか確認している。

「誰」の wh 素性は連体節の中の指定部を経由した後、主名詞の DP 指定部へと移動する。D 主要部に「も」が付加し、「D+も」で量化詞的にはたらくとすると、指定部・主要部の関係にある wh 素性と「D+も」とが一致し、「全称」として解釈される。wh 素性が照合されると、不定語は「か」と結びつくことができなくなるため、文末の「か」は Wh 疑問文ではなく Yes/No 疑問文のマーカールとしてはたらく。

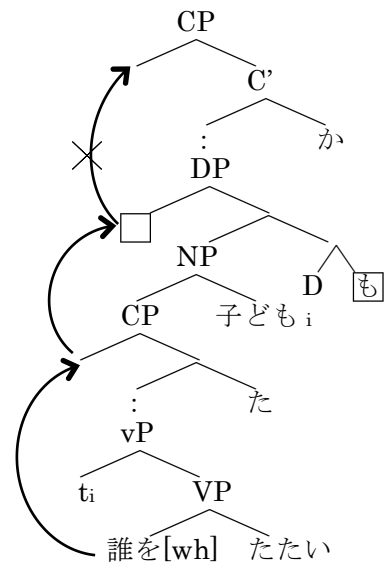


図 1

4.2 累加の「も」

(20) 先生は、[CP□[DP[DP...[NP[CP...誰をたたいた]子ども]D]も] 叱りました□か。

②先生は太郎をたたいた子どもを叱った。他に誰をたたいた子どもを叱ったか確認している。

「誰」の wh 素性は連体節内の CP 指定部へ非顕在的に移動し、その後 DP 指定部を経由する。「も」が DP に付加し一致を可能とする位置にないとすると、主要部 D は wh 素性と照合する素性をもたないため、wh 素性が DP 指定部に移動しても指定部・主要部の一致は起こらない。wh 素性は上の CP 指定部まで移動し、C の主要部である「か」と指定部・主要部の一致が起こることで、Wh 疑問文として文が解釈される。

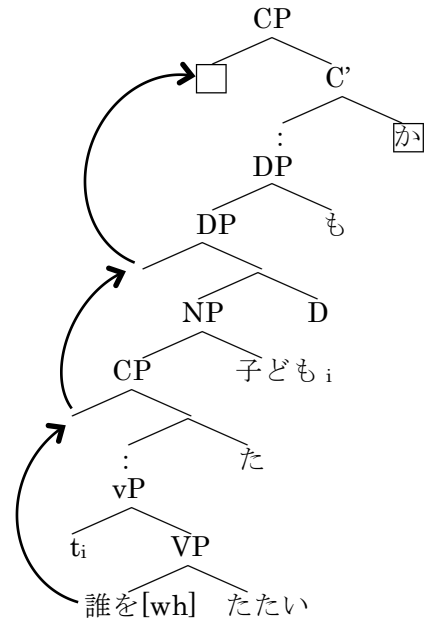


図 2

4.3 「も」の指示対象

沼田 (2009) では、とりたて詞がとりたてる文中の要素を「自者」、それに端的に対比される「自者」以外の要素を「他者」と定義している。Kobuchi-Philip (2009) の意味表示に従えば、累加の「も」と全称の「も」の相違点として、累加の「も」はとりたての対象である自者を明示的に指示しているのに対し、全称の「も」はその集合しか指示していないことが挙げられる。

- (21) a. 子どもも叱られた。 (自者：子ども 集合：叱られた人)
 b. どの子どもも叱られた。 (自者：? 集合：子ども)

累加の「も」の構造ととりたてる対象との対応は沼田・徐 (1995) によって指摘されている。(22)と(23)のどちらの「も」も DP に付加し、付加対象となっている DP が自者、それに相当するものが他者として解釈され、「他の同類の事態」の範囲となる集合は、その他の要素や文脈によって設定される。

- (22) a. [太郎をたたいた子ども]も叱られた。
 b. 叱られた = {[太郎],[あの子ども]}...+[太郎をたたいた子ども]
 (23) a. [[太郎]もたたいた]子どもが叱られた。
 b. たたいた = {[花子],[次郎]}...+[太郎]

全称の「も」の場合、「も」は DP 内に生起し、「も」が付加した D すなわち限定詞 (determiner) の指示する要素を自者とし、それに相当するもの (太郎や花子など) が他者となると考えることができる。また集合は、「D+も」が併合する補部などによって設定されると考えられる。

- (24) a. 誰をたたいた子どもも叱られた。
 b. [DP 誰をたたいた子ども] [D+も]

c. xをたたいた子ども = {[太郎]+[花子]+[次郎]+[ゆり]}

このように、累加の「も」も全称の「も」も「も」が付加した対象を自者、その他の要素による条件を満たすものを集合としており、「も」のとりたてる対象が「も」の統語構造上の生起位置によって変わることが明らかとなった。

5. 介在効果

Tomioka (2008) が指摘しているように、不定語の非頭在的移動を妨げる累加の「も」として、(25)のような例が知られている。

- (25) a. ??太郎も何を食べたの?
 b. 何を太郎も食べたの?
 c. ??どの子も何を食べたの?
 d. 何をどの子も食べたの?

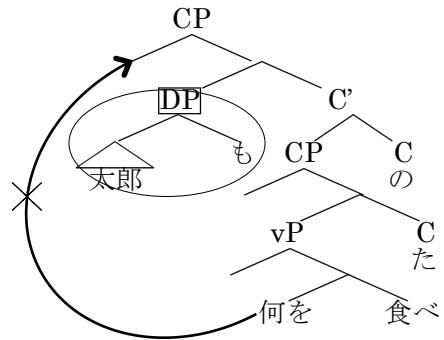


図 3

上記のような介在効果 (Intervention effects) は、全称であれ累加であれ、不定語が「も」を含む DP を越えようとするときに生じる。介在子となる焦点演算子が具現化されるのは DP として書き出されたときであり、(26b)のような構造では、不定語は DP に c-統御されず、「も」が付加された DP の内部から移動するため「も」は wh 移動の妨げとはならない。

- (26) a. [CP__ [vP [DP [太郎も]]]] 何を食べ]たの?
 ↑
 ×
 b. [CP__ [DP [DP [CP 誰をたたいた] 子ども] も]] 叱られたの?
 ↑
 c. [CP__ [DP [DP [CP 誰をたたいた子ども] も]]] 誰に叱られたの?
 ↑
 ×

6. まとめ

累加の「も」は最大投射、全称の「も」は主要部に付加し、その解釈の違いは wh 素性との一致と「も」の付加対象によって説明されるということが明らかとなった。また、「も」が D(P)に付加した場合だけでなく、v(P)や C(P)といった構造に付加した場合であっても累加と全称の両解釈がもたらされる。

- (27) 太郎は[vP 何を食べも]しましたか。
 (28) 花子は[CP 何を食るときも]フォークを使いますか。

また、「あるいは」を意味する並列助詞の「か」やとりたての一種とされる対比の「は」も、累加の「も」と同様最大投射の付加位置に現れる。どの要素も不定語と「か」や「も」との移動を妨げないと

ということが下記の例から明らかである。以上より、本発表で提案した構造の違いは「も」や疑問の「か」に限らず、他のとりたて詞などにも広く応用できると考えられる。

(29) 花子は、[CP[DP[DP どこに出した論文]は]評価されたか]知りたがっている。

(30) 花子は、[CP[DP[DP どこに出した論文]か本が]評価されたか]知りたがっている。

(31) 花子は、[DP[DP[DP どこに出した論文]か本を]評価した教授も]尊敬している。

表 1 累加の「も」・全称の「も」の特徴まとめ

	累加の「も」	全称の「も」
生起位置	最大投射 付加位置	主要部 付加位置
wh 素性	照合しない	照合する
自者/他者	最大投射	主要部

参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房。
- Beck, Sigrid and Shin-Sook Kim (1997) On wh- and operator scope in Korean. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 339-384.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hamblin, C.L. (1973) Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10: 41-53.
- 長谷川信子 (2002) 「主要部内在型関係節：DP 分析」『Scientific Approaches to Language：神田外語大学言語科学研究センター紀要』1: 1-33.
- Hoji, Hajime (1985) Logical form constraints and configurational structures in Japanese. PhD dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Ikawa, Hajime (2012) What the ineligibility of wh-phrases for argument ellipsis tells us: On the inertness of phonetically null elements. In Online *Proceedings of GLOW in Asia IX*.
- Kobuchi-Philip, Mana (2009) Japanese mo: universal, additive, and NPI. *Journal of Cognitive Science* 10: 173-194.
- 那須紀夫 (2012) 「助詞残留が起こる文頭の位置について」『CLAVEL』1-12.
- Nasu, Norio (2012) Topic particle stranding and the structure of CP. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 205-228. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5：第 9 部 とりたて・第 10 部 主題』東京：くろしお出版。
- Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』東京：ひつじ書房。
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』175-207. 東京：くろしお出版。
- Saito, Mamoru (2007) Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203-227.
- Saito, Mamoru (2017) Japanese wh-phrases as operators with unspecified quantificational force. *Language and Linguistics* 18: 1-25.
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』東京：くろしお出版。
- Shimoyama, Junko (2006) Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics* 14: 139-173.
- Sugisaki, Koji (2011) A constraint on argument ellipsis in child Japanese. *Nanzan Linguistics* 7: 63-76.
- Takahashi, Daiko (2002) Determiner raising and scope shift. *Linguistic Inquiry* 33: 575-615.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 第三巻』東京：くろしお出版。
- Tomioka, Satoshi (2008) Intervention effects in focus: From a Japanese point of view. In Shinichiro Ishihara (ed.) *Potsdam Working Papers in Linguistics: Proceedings from WPSI 2*: 97-118. Potsdam: Universität Potsdam.
- Yatsushiro, Kazuko (2001) The distribution of mo and ka and its implications. *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 3: 181-198.